

# 三条西実隆画像現状・復元模写

村岡 ゆかり

一九九六年五月から九月にかけて三条西実隆画像の現状と復元の模写を行った。以下はその記録である。

なお復元模写において、欠落した画賛の文字復元に関する詳細な記録については、和田幸大氏の「三条西実隆画像画賛の復元」をご覧ください。きたい。

## 一、原本

### 原本観察

所蔵／三条西実謙氏所蔵

顔料(推定)／画賛―墨・胡粉・丹・臙脂・小豆色味を帯びた絵の具

肖像―墨・胡粉・黄土・弁柄・岱赭・雲母

暈―墨・胡粉・緑青

表装形態／掛幅装(行の真)

原本の状態／縦三四、一cm×横二三、四cmの肖像画である。

絵絹は極めて粗く、彩色以外の素地の絵絹部分は、黒茶色の肌裏紙が透けて見えるほどである。また、その肌裏紙が画面の色調に影響を与えている。

彩色は、細かい粒子の顔料が厚く塗り固められ、掛幅装で保存されてきたために絵の具層や絵絹に剥離剥落・

亀裂・横折れが見られる。変色は緑青に見られるが、他は埃等の汚れが薄くつく程度で目立った色の変化は見られない。

## 二、現状模写

### (1) 材料

和紙／楮紙(楮一〇〇%、pH値七・三、紙舗「直」製)

顔料／墨・胡粉・黄土・黄土(中口)・弁柄・岱赭・藍・丹・コチニール・緑青・雲母・白緑(黒く焼いて使用)・金茶

接着剤／三千本膠(二〇〇ccの水に対して三千本膠一本の割合の水溶液)・ふのり

筆／水筆・彩色筆・面相筆・平筆

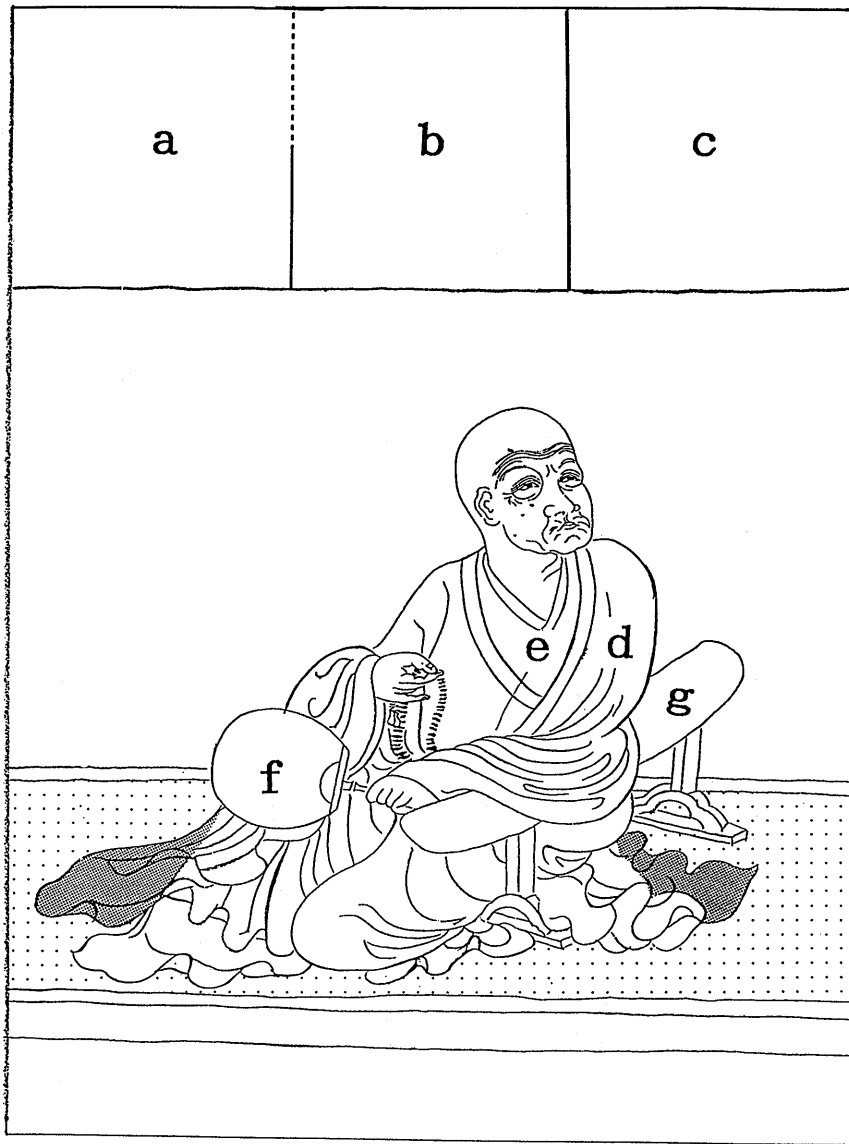
### (2) 模写の手順

① 原本のカラーの写真(本所技術官吉田成氏撮影)を原寸大に引き伸ばし、その上に礬水を引いた和紙を置き、墨で上げ写しを行う。

② 上げ写し完了後、もう一度和紙に薄い礬水を引く。

③ 作業する和紙の裏に薄く墨を塗る。これは、原本の肌裏に黒茶色の紙が使用されており、それを表現するために行ったものである。

④ 薄墨を染め付けた和紙で裏打ちをした後、仮張りにはる。(本所技



模写に使用した顔料

※「」内は復元模写

顔・手／胡粉＋黄土・岱赭、墨・胡粉＋

弁柄

「胡粉＋コチニール＋黄土・岱赭、墨・胡粉＋コチニール」

口／岱赭（赤口）

「岱赭（赤口）」

a／コチニール＋丹＋胡粉

「コチニール＋丹＋胡粉」

b／胡粉・黄土

「胡粉」

c／藍＋岱赭＋胡粉

「藍＋岱赭＋胡粉」

d／胡粉地に黄土（中口）・黄土＋岱赭

「胡粉地に黄土（中口）」

e／胡粉地に雲母（膠とふのりで溶く）

「胡粉地に雲母（膠とふのりで溶く）」

f／弁柄地に黄土と丹の線

「弁柄地に黄土と丹の線」

g／岱赭（黄口）の具（岱赭＋胡粉）

岱赭（赤口）

「岱赭（黄口）の具（岱赭＋胡粉）

岱赭（赤口）」

数珠／墨＋岱赭（黄口）

「墨＋岱赭（黄口）」

畳／焼緑青（10番＋11番＋9番）＋金茶

「緑青（10番＋11番＋9番）」

畳縁／胡粉

「胡粉」

A



B



術官中藤靖之氏による)

⑤ 畳・畳縁の模様以外に焼白緑の上澄みを極く薄く塗る。

これは、肌裏紙が透けて見える絹地の質感を表現するために行ったものである。しかし、畳・畳縁部分は裏彩色が塗られていた形跡があるため、この彩色は行わなかった。

⑥ 仮張りから和紙を剥して、絹目を黄土顔料で、画賛の剥落した着色下地を〔図〕―a・bそれぞれ顔料で上げ写しを行う。

⑦ 極く薄く礬水を引き、乾燥後、仮張りに貼る。(本所技術官中藤靖之氏による)

⑧ 彩色を行う。(使用顔料は〔図〕に示す)

なお〔図〕―A・Bは、剥落部分を観察すると、絹目の下に顔料の痕が見えるため、裏彩色が施されていることが考えられた。その顔料は、肉眼で判断することはできなかったが青味がかつた色であることはわかる。また、着衣のうち〔図〕―Bについては、他の着衣が胡粉の上から黄土を塗っていたのとは違い、裏彩色の後、直接絵絹に黄土の具(黄土+胡粉)・黄土を塗っていたと推測される。そこで〔図〕―Bについては、藍の具(藍+胡粉)を使い、裏彩色の見える剥落の様子を表現した。

また、〔図〕―cについては、原本の顔料を特定することが出来なかつたため、原本の色に合わせて胡粉と岱赭と藍の混色を使用した。

⑨ 彩色完了後、画賛と画像・畳の墨線の描き起こしを行う。その後、全面に古色付けを行い完成させる。

### 三、復元模写

#### (1) 材料

和紙/楮紙(楮一〇〇%、pH値七・三、紙舗「直」製)

顔料/墨・胡粉・黄土・黄土(中口)・弁柄・岱赭・藍・丹・コチニール・緑青・雲母・白緑(黒く焼いて使用)

接着剤/三千本膠(二〇〇ccの水に対して三千本膠一本の割合の水溶

液)・ふのり

筆/水筆・彩色筆・面相筆・平筆

#### (2) 模写の手順

①~④までの手順は、現状模写と同様である。

⑤ 着色されていない絹地の部分に、焼白緑を塗る。

肌裏紙が透けて見える絹地の質感を表現するためであるが、現状模写と違う点は、賛や人物等に関しては、彩度を上げるため上から焼白緑の上澄みを塗らなかつたことである。

ただし、この特に濃い黒茶色の肌裏紙が、当初からのものなのか後世に修理によって裏打ちされたものなのかは判断できていない。このため今回の復元は、肌裏紙を黒茶色の状態で表現した。

⑥ 賛、畳縁を彩色する。

⑦ 仮張りから和紙を剥して、絹目を黄土顔料で、残存している画賛と畳縁の模様を墨で上げ写しを行う。

⑧ 極く薄く礬水を引き、乾燥後、仮張りに貼る。

⑨ 彩色を行う。(使用顔料は〔図〕の「」に示す)

⑩ 欠落した画賛の復元を行う。

剥落して判読できなくなっている和歌を三条西実隆の歌集より見い出す(本所教授橋本政宣氏による)。さらに原本の筆者である三条西公條の筆跡群から集字し、一貫した流れとなるようにならずに残った墨の跡をたどって文字を補った(本所技術官和田幸大氏による)。それを基に、文字の下げ写しを行う。その後、和

田氏が文字の仕上げを行った。

#### 四、製作を終えて

この原本は、細かい粒子の顔料が厚く塗られている。しかし、模写も同様に細かい粒子の顔料を厚く塗れば、数年経つと、原本の様に折れや剥落が起こってしまうだろう。そこで模写は原本より薄目に顔料を塗ることにした。しかし現状模写に関しては、「二、現状模写の手順⑤」で示した作業工程のように、全体に塗った焼白緑の上澄みの色が画面に最後まで影響して、彩度が上がらないという状況になってしまった。そのため、くすんだ模写にならないように気を使いながら作業を行った。その反省から、復元作業では「三、復元模写の手順⑤」で示した作業工程のように、絹地以外のところに焼白緑を塗らなかったのである。その結果、色の発色はなんとか出たように思う。

画賛については、まず顔料の特定について迷った。特に〔図〕―aは、それぞれ少なくとも3種類の顔料が混色されていると思われるため、その3種類の色を探り当てるために、何回も色の組み合わせを行わなければならなかった。また現状模写の〔図〕―bの剥落表現に関しては、顔料の中でも特に微妙な加減を要する胡粉の扱いに手間取り、苦労したといえる。